潮流

鳥取県医師会常任理事（小児科医）　笠木　正明

子育ては誰のもの？
―見守り寄り添う支援を―

子育ては、母親だけにその役割や責任があるものではない。子どもが小さいうちは、ある程度は母親に比重があることは否めないが、母親にのみ過剰な負担がかかる環境が子育てにふさわしいとは、誰も思っていないはずだ。家族全体・地域全体で子どもの世話を分担していた昔ながらのつながりが薄れてしまった現代において、偏ってしまったその役割をいかに支援していくのか。

保育園・子ども園の整備や、一時預かりの実施など行政からの支援、育児休業の取得・時短勤務など企業からの支援など、男女関わりなく、また就業の有無にも関わりなく、選択の幅を広げていこうという議論を多く目にするようになってきた。

刻々と変化する子育ての状況や個々のニーズに合わせて、柔軟に選択できる環境を整えようという風潮が生まれつつあるように思う。鳥取県も、安心して子育てができる「子育て王国とっとり」としていろいろな子育て支援事業を策定しているが、その成果もまだ十分とは言い難い。

しかしそれ以上に、そうようにはいかないことが多々ある。愚痴の一つもこぼしたくなる。それでも、「頑張っているね」「ありがとう」「助かるよ」そんな一言だけで救われる場面が少なからずあることを、子どもたちとその保育者に日々接する中で目の当たりにしてきた。たとえ負担が偏った環境だとしても、「負担がある」という事実を理解してくれる人がそばにいるということは、どんな支援事業にも替え難い、大きな支えになり得るのだ。

そして、そんな言葉をかけられるのは、子どもから見ても母親から見ても一番身近な存在である「父親」であり、子育てにおける役割分担／責任分担という点において、「父親」が子育てに積極的に参加するということに大きな意義がある、と強く感じている。父親が不在だという家庭環境も珍しいことではなくなった。それでもあえて「父親」がこの役割を担うことに意義があると、ある種の願いも込めて申し上げたい。

昨今、某県知事が育児休暇を取得したことが殊のほか大きく報道されたり、「育メン」などという言葉がメディアで流行語であるかのように話題となるなど、父親の積極的な育児参加を後押しする風潮が生まれつつあることが確かな半面、表立って子育てに参加することが何か特別な行動のように捉えられがちであるのが現状だ。

人間だれしも父と母の存在があってはじめて、この世に生を受ける。その父と母が、子育ての役割と責任を分担するということは、特別な行動などではなく、ごく自然な成り行きであるはずなのに、その自然な役割を担い責任を負うことに、社会的な理解も支援も追いついてきていない。この歯がゆさを解消するためにも行政や企業からの支援は急務だが、子どもの成長を共に見守り共感し、子育ての担い手に寄り添ったよき理解者であること―その思いが社会全体の根底にあってこそ、行政や企業からの支援が生きてくるのだと思う。

「理解して共感してくれる存在」、それは父親だけに限った話ではなく、夫婦間に限らず、親子間、家族間、友人間、世代間、そして何より社会全体の中での大事なキーワードである。そのための議論は、小児医療に携わる立場からも、更に盛り上げていく必要があると感じている。

「育メン」ブームを一過性のもので終わらせてしまわないためにも、まずは世の「父親」が、子育てのよき理解者であってほしいと願う。

（米子市）